書評

石原真衣・村上靖彦.（2024）.岩波書店.『アイヌがまなざす：痛みの声を聞くとき』
土屋和代・井坂里穂編著.（2024）.東京大学出版会.『インターセクショナリティ：現代世界を織りなす力学』

加藤恵津子
（CGS副センター長、編集委員長）

書評とは通常、一冊の本への批評だ。だが、偶然にもほぼ同じ時期に読んだ二冊が、ジャンルを超えて共鳴しあうことがある。評者の場合、『アイヌがまなざす』（2024年6月13日発行）を読んで、なぜ自分がこれほど衝撃を受けたのか、またその衝撃から何を読み取るべきか――これらを探るにあたり、『インターセクショナリティ』（同年6月21日発行）が手助けをしてくれた。よって、主に前者を評しつつ、後者も部分的に評することで、それぞれの本が編まれた意義をインターテクスチュアルに浮かび上がらせてみたい。

『アイヌがまなざす』は、先住民人類学（indigenous anthropology）から非・先住民人類学への批判の書であり、さらに本書のもっとも重要な部分は、先住民フェミニズム（indigenous feminism）から非・先住民フェミニズムへの批判であるように筆者には見える。本書で批判されているのは、明治期から今日までの150年以上にわたり、和人（日本人のマジョリティを占める大和民族）が行ってきたあらゆる「アイヌ文化」研究であり、和人が一方的に語ってきたアイヌの人々についてのあらゆる言説であり、かつ、それらの背後にある圧倒的に暴力的な植民地支配である。つまり本書によって、これまで和人に一方的にまなざされる対象だったアイヌが、和人をまなざし返しているのだ。これはポストコロニアルな転換であり、異文化研究のど真ん中に陣取ってきた文化人類学において最も求められるものである。実際、第一著者の石原は、アイヌと琴似屯田兵（会津藩）の出自を持つマルチレイシャルの文化人類学者であり、日本における先住民フェミニズムの先駆者である。その石原が、現象学者の村上とともに、アイヌの

人権回復のために行動する5人の知り合いをインタビューし、その語りの内容を分析する章（第1、2、4、6、7章）と、知識人のあいだに横たわるレイシズムを理論的に批判する章（第3、5、8章）から成るのが本書である。いっぽうテーマで分けるなら、「第1部　遺骨返還運動とアイヌ近現代史」（第1～3章）、「第2部　インターセクショナリティ」（第4、5章）、「第3部　アイヌと外部を行き来する」（第6～8章）の三部構成となっている。

この中で、ジェンダー・セクシュアリティ研究にもっとも直結するのが「第2部　インターセクショナリティ」の二つの章だ。第4章「アイヌ女性と複合差別」では、70代女性、多原良子さんのライフヒストリーが描かれる。彼女は、和人の女性国会議員からアイヌ女性に向けられたヘイトスピーチと、アイヌの社会運動内部の男女格差の、両方と闘っている。この章が明らかにするのは、マイノリティの中のマイノリティ、アイヌ女性の困難の独自性である。まずアイヌの権利回復運動を主導するアイヌ男性たちにとっては、「アイヌ問題が第一で女性の困難は存在すら見えない」のであり、「女は黙れ」の風潮がある。次に女性運動において、多原さんは「どこに行っても当事者でない」。和人女性とは「全然問題点のレベルが違う」し、運動に参加する在日コリアンや部落出身の女性は「きちんと教育を受けた」人たちである。「小学校行ってない、子守だけさせられた」多原さんは、運動に参加しても「まったくわからなかった」。しかし2008年、自分が複合差別（インターセクショナル）の状況にあることを知り、「電撃を受けたような感じ」を覚える（以上、pp. 144-151から引用）。アイヌであり女性である個人が自分の状況を理解すること、すななわち「当事者」になること自体が、いかに難しいか。個人の具体的な体験の語りに注目するライフヒストリーの手法だからこそ、浮かび上がった点だろう。

しかし、より理論的・抽象的だが、評者にとってより衝撃が大きかったのは第5章「先住民フェミニズム批評―― Ain't I a Woman?/「私」は女ではないの？」である。その冒頭部で石原は言う。「現在において日本人女性のほとんどすべてがレイシストおよびその共犯者であると述べてみたい」（p. 171）。また特に「女性知識人への手紙――日本人の白人性」（第3節）は、知識人を自認する「日本人女性」（評者も含む）に、より鋭く突きつけられた刃である。「『私』はあなたと同じ『女』ではない。この声を発するために、私たちには一〇〇年という年月

が必要だった」（p. 188）という最初の一文。これは石原の祖母や母が、アイヌ女性でありながら「普通の女性と同じ」（p. 189）になろうとし、心身に大きな負担や傷を負ってきたことを示唆する。にも拘らず、日本人女性フェミニストは日本人にしか関心を持ってこなかった。フェミニズムやジェンダー論の教科書には、アイヌを含む被殖民者女性――沖縄や部落や在日――をとりまく植民地主義やレイシズムを取り上げているものはない、と石原は指摘する（p. 190）。確かに、あるとしたら大日本帝国時代の朝鮮半島支配と「従軍慰安婦」の記述であり、それも注かコラムの扱いであると、評者も思う。マジョリティであるということは、ここまで差別に鈍感になれるのかと愕然とする。

しかし同時に気づかされるのは、朝鮮半島出身の女性への、また沖縄の女性への（戦後は日本とアメリカによる二重統治下の）暴力について、なぜマジョリティである本土の日本人女性は知っているのかといえば、それは被害当事者である女性たちからの、命を削るような告発や運動にほとんどすべてを負っているという事実である。これはひいては、アイヌ女性が過去150年超にわたり和人から受けてきた暴力を告発することがいかに困難だったかを物語っている。明治維新の頃、アイヌは、朝鮮王朝や琉球王国のような国家を持たずに暮らしていた。この状態で、和人からの一方的な入植支配を受け、労働力や性の対象として男女とも連れ去られてコタン（集落）が崩壊し、和人の持ち込んだ伝染病や、過酷な土地への強制移住で人口が激減し、またたく間にマイノリティになったアイヌの人々の、まして女性に、なぜ暴力被害を記録・伝承・告発しないのかと言う方が酷ではないか。だが、当事者やその子孫が告発しなければ暴力は存在しない、などという言い訳は通用しない。

石原は第5章の結論として、日本人女性（それは石原自身の一部でもある）に対し、自らの暴力性/共犯性への感性を養い、マイノリティ女性のアライ（ally）となるよう呼びかける。こうすることによってのみ、日本のフェミニズムの中のレイシズムを、少しでも減じていくことができると示唆される。

『アイヌがまなざす』第2部のタイトルである「インターセクショナリティ」（交差性）は、本稿のもう一つの書評対象である、土屋・井坂の編著（2024）のタイトルでもある。『インターセクショナリティ』は、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻が2023年に主催した同名のシンポジウムをもとに編纂

されており、収められた十章は、同大学の人文・社会科学の教員がそれぞれの専門からこのテーマに迫った論考である。英文学者のアルヴィ宮本なほ子（第2章）によれば、「インターセクショナリティ」とは、もとは1989年、アメリカのキンバリー・クレンショーが法学の論文で、「黒人女性が従属させられている特殊な状況」を説明し、是正するために提唱した概念である。それは、黒人かつ女性であることが単なる「和」ではなく、累乗的な「二重差別－複合差別」を生み出していることを示したものだ（p. 43）。インターセクション、つまり交差点のイメージは、「別々の方向から来る複数の車に轢かれる歩行者」（同章、p. 45）を想起させる。宮本自身は、交差点でなく、クレンショーの提案するもう一つの比喩である「地下室」を採用しつつ、小説『フランケンシュタイン』に複合差別の凄惨さを見る。この小説では、ヨーロッパ人男性科学者・フランケンシュタイン博士が、怪物（非ヨーロッパ人＝非人間の代表）である男性の人造人間をまず作り、次に、その「妻」とすべく女性の人造人間を作ろうとする。だが恐怖の想像に駆られた科学者本人によって、彼女は途中で八つ裂きにされる。彼女の身体が受ける暴力は、同じ科学者が作った男性怪物が生命を得て、実験室を出、出会う人びとに恐怖や嫌悪を与えつつも北極圏にまで旅をするのとは対照的である。

『インターセクショナリティ』のおかげで、評者が『アイヌがまなざす』をより良く理解できた理由の一つは、「交差性」がただの結節点ではなく、命にかかわる危険なイメージから来ていることを思い出させてくれたことだ。アイヌであることは、差別や暴力を受けたり、希死念慮を持ったりするという点で、命にかかわるほど危険となりうるが、女性であることも同じくらい危険となりうる。実際、石原の文章には死のイメージが漂う。その背後には、命を失った多くの同胞、特に女性の存在を感じさせる。「人種的特権性をもつということは、毎日を殺されるかもしれない恐怖と共に生きるのを免除されていることを意味している」（p. 170）、「死者に操られ…書くたびに私は命をこぼし続け、それゆえにそれぞれのテキストは私にとっての遺書である」（p. 361）。

もう一つ、『インターセクショナリティ』が『アイヌがまなざす』とつながった点は、希望と連帯の持ち方についてである。クィア理論家の清水晶子（第10章）は、一見逆説的だが、「安心をもたらさない」インターセクショナリティをマジョリティが受け入れる重要性を説く。差異や多様性を「安心して享受でき

る」状態とは、マジョリティ側が、マイノリティがもたらすかもしれない危険をコントロールしている状態にすぎないからだ。清水は、クィア・ネーション（90年代にニューヨークで創始されたクィア・アクティビズムの団体）の有名なコール、"We're here, we're queer, get use to it"（私たちはここにいて、私たちはクィアだ、それに慣れることだ）を引きながら述べる。「マイノリティはしばしば『私たち［＝マジョリティ］』のもたらすその不安と共に生きてきたのであり、ここでクィア・ネーションが呼びかける相手に求めているのは、その不安の一端をそちら側も担ってくれ、ということに他ならない」（pp. 170-180）。

クィア・ネーションだけでなくファースト・ネーション（カナダ英語で「先住民」）もまた、マジョリティにとって「安心できる」存在であることを強要されてきた。和人が安心して享受できる「アイヌ」とは、植民、研究、観光などを通して和人がまなざし、管理してきた、美しく珍しい「アイヌ文化」のことであり、人権や、自然資源の使用権利の回復を要求してくる「アイヌ（アイヌ語で「人間」）」のことではない。日本人女性が安心して享受できる「アイヌ女性」とは、美しくけなげな少数民族の「同じ女性」であり、日本人女性の暴力性や共犯性を問うてくる挑戦者ではない。しかしこうした日本人への、また日本人女性への呼びかけを聞かぬふりをするのは、すでにある差異すら認めないことを意味する。石原の呼びかけもおそらく、「私はあなたとは違う。そう言われて不安だとしても、日本人女性はその不安を担ってほしい。アイヌ女性はずっと、もっと不安だったのだから」ということではないだろうか。石原の「手紙」は、一人でも多くの日本人女性に読まれるべきであり、時間はかかっても、その一人でも多くが返事を書くべきであると思う。この書評も、より長い時間をかけて書くべき返事の、まずは第一歩ある。